



多摩大学 学長
寺島 実郎

てらしま・じつろう氏

1947年北海道生まれ。

1973年 早稲田大学大学院政治学研究所修士課程修了。
三井物産株式会社入社

1991年 米国三井物産ワシントン事務所長

1994年 石橋湛山賞受賞

1999年 株式会社三井物産戦略研究所所長、2009年同
会長

2001年 一般財団法人日本総合研究所理事長、2006年
同会長、2010年同理事長

2002年 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授

2009年 多摩大学学長

2010年 早稲田大学名誉博士学位

現在、文部科学省日中韓大学間交流・連携推進会議委員、
経済産業省資源エネルギー庁総合資源エネルギー調査会
総合部会委員、国土交通省新たな「国土のグランドデザイ
ン」構築に関する有識者懇談会委員等兼任

近著は「リベラル再生の基軸—脳力のレッスンⅣ」(岩波
書店)、「何のために働くのか—自分を創る生き方」(文春
新書)、他著書多数。

ローカルとグローバルを融合する「グローバル人材」を育成

多摩大学は今年、創立25周年を迎えました。世界史的には、本学が創立した1989年(平成元年)にベルリンの壁が崩れ、1991年にはソビエト連邦が崩壊し、冷戦が終結。「イデオロギーの対立」の時代が終わり、世界は「グローバル化」「IT革命」といった時代に突入しました。本学の25年間も、まさにそうした時代の流れと併走したものでした。国境を超えて人、物、金、技術、情報が自由に行き交う時代を生き抜く人材、すなわち、今でいうところの「グローバル人材」の育成に、他に先駆けて真正面から取り組んできた大学であるといえるでしょう。

しかし今、冷戦後のパラダイムが新たな局面を迎え、新たな世界秩序とその中での日本の役割を模索せざるをえない状況において、本学も創立から25年が経過し、学長として、今後どのような舵取りをしていくべきかが鋭く問われていると認識しています。

問題意識の強い市民が学び、活動する「多摩」

2009年、私は学長に就任しました。この話を聞いた時、もしこの大学名に「多摩」といった地名が入っていなければ、もし地域へのこだわりのない大学であったならば、あるいは引き受けなかったかもしれません。それくらい、この大学の地域への思い入れに共感した部分がありました。

多摩というところは、実にユニークな歴史を持つ場所です。広く捉えれば、多摩とは多摩川と相模川とに挟まれ、北は八王子から南は三浦半島周辺にまで広がる、東京西部と神奈川東部にまたがる地域。もともと家康の関東入府に伴い、千人の武士集団が住み着いた地域で、彼らが新撰組となり、また自由民権運動もここで大いに展開されました。戦後は多摩ニュータウンにおいて、市民自らが「多摩自由大学」を立ち上げるなど、問題意識の強い市民が主体的に学び、活動するDNAが今なお息づく場所なのです。本学でも「多摩学」とい

うものを立ち上げ、この地をさらに深く研究しようとしています。そのことは、真に有用な「グローバル人材」の育成にもつながると考えています。

私の知るところ、外国語を駆使して世界を飛び回るだけのビジネスパーソンを、世界は「グローバル人材」とは認めません。自らが拠って立つ地域に深い見識と愛情を持つ人物だけが国際社会において敬愛されるのです。つまり、ローカルを徹底して深めることがグローバルに活躍する力となり得る。私は、ローカルとグローバルを融合した「グローカル」という観点がこれからのキーワードになると考えています。本学においても、「グローカル人材」の育成を今後の大きな目標として掲げ、取り組み始めています。

手作り感あふれる「現代の志塾」

本学は2009年に教育理念を、「現代の志塾」としています。

私はこれまで多くの大学に関わってきましたが、本学ほど学生の面倒見のいい大学を他に知りません。その点で「志塾」という名に全く偽りはなく、「手作り感」にあふれた大学といえます。とりわけ学生指導から就職指導に至るまで、本学職員の貢献度は計り知れないほど大きいと感じています。

全学生がゼミナールに帰属し、ゼミ中心で学んでいくというスタイルも「現代の志塾」にふさわしいと考えます。本学教員は私を含めて実務家出身者が多いのですが、先生方に特にお願いしているのは、学生一人ひとりにきちんと向き合うこと。教育、研究、地域貢献という役割の中では、教育に6割の比重をかけて下さいと言っています。

私は、学生と向き合うことを自分自身にも課しています。本学に様々なゼミがあるなか、私の主宰するインターゼミ(社会工学研究会)というものもあり、毎週土曜日に東京・九段のサテライトキャンパスで開催しています。学部生と大学院生の精鋭がグループワーク

を行い、課題解決力を磨いていく。研究対象にした企業から感謝状を頂いたり、震災復興コンテストに入賞するなど、成果も確実に上がっています。

さらにもうひとつ、私が学生と向き合うために、同時に地域社会に貢献するために行っているのが、今年7年目を迎えた「多摩大学リレー講座」です。各界の論客に講演して頂くなかで世界各地の現況や日本国内の諸問題を多面的に検討し、受講者が世界認識を獲得することを主眼としています。半期で全12回。定員は約500人。うち本学学生が200人で、彼らは最後にレポートを提出し、私も審査して単位認定しています。学生以外は主に地域の社会人達で、半期で1万2000円(多摩市在住者等は1万円)を払って受講されます。延べ7万人の受講者を集めました。「有料」でもこれほど多くの人々が参加するところに今後の大きな可能性を感じています。

本学は1993年より大学院を設置しており、現在社会人向けMBAコース・ビジネスICTコースとして確固たるポジションを築いたと自負していますが、大学経営においても今後は「社会人」、特に「地域の社会人」がキーポイントになるのではないかと考えています。このところ日本においてもようやくNPO活動が根付きつつありますが、NPOの法務や経理、人事等の専門知識を持つ人材は不足しています。リタイアした人々がそうした知識を学び直し、改めて社会と関わっていく際に大学が役立つ。例えばそのような価値を新たに創造し、提供していくべきではないかと思っています。

ここ1、2年、インターゼミやリレー講座に参加してくれた学生の中で、「4年間で自分は大きく成長し、希望の就職も実現しました」と喜ばしいメッセージを残して卒業する学生が増えています。そういう確かな手ごたえと、明白な実績をさらに高く積み上げていくことが私の責務であると認識しております。